

## 言語学習者のライフストーリーをめぐっての覚書 —言語習得（使用）という複雑な現象—

中山亜紀子

### 要旨

話す言語が変わると自分に対する感覚（自己感）が異なるという現象が報告されている。筆者は、それを言語とそれを使う人、また社会との関係から生まれる感覚であると考え、そのような感覚に迫るためには、「私」という感覚は、日々のアイデンティティワークから生まれつつも、その個人史的な意味をライフストーリーとしてとらえる必要があることを述べる。そして、「自分らしさ」が異なる（言葉が変わっても自分は自分だ／自分ではない感じがする）ことに注目した筆者の調査例を使って、日本語教育に対する示唆を述べる。

### 【キーワード】

自己感 物語的アイデンティティ 第二言語習得 日本語教育 ライフストーリー

私とは「私」にとって最初の観客であり、主役でもある。

言葉とは、「私」の親友であると同時に、最大の敵でもある。

（鄭嘆恵, 2005: 237）

### 1. はじめに

1960年代に自然科学をモデルとして始まった応用言語学や SLA 研究では、実験や統計が長らく研究の中心手法であり、当事者の証言は「主観的である」との理由で遠ざけられてきた。しかし、このような「知」のあり方自体が批判されるようになってきている。それは、人文科学や社会科学の分野で声高に叫ばれるようになった「表象の危機」、それに関連する「意味」それ自体が安定したものではないという考え方、また個を自律的で合理的な主体（subject）としてとらえるのではなく、その時その場で構築される「主体（subjects）」としてとらえようという考え方（Block, 2007）に、応用言語学も SLA 研究も無関係でいられなかったからであろう。

一方で、それに呼応するように、90年代半ばから、ポスト構造主義、社会構成主義の影響を受けた研究者たちが、社会と個人という二項対立で言語学習をみることに異議を申し立て、学習者と学習文脈を丸ごととらえようと、質的研究手法を用いて数々の成果をあげている（代表例として、Norton, 2000、Pavlenko & Blackledge, 2004、八木（2004）所収の各論文を挙げておこう）。そこでは、一度作られたら変わらない本質的なものではなく、日々（再）構築され続けるアイデンティティ概念が用いられている。

筆者もこの影響を受け、ライフストーリーを書いたが、そこに、錯誤はなかったのだろうか。日本語教育に応用するためには、あらかじめ考えておかなければならない事柄はないのだろうか。

以下では、まず、学習者の自己感という問題を設定する。次にエスノメソドロジーなどの成果を使って、アイデンティティの（再）構築は日々の日常生活において行われていることを論じる。さらに、正統的周辺参加論への批判をヒントに、しかし、場を移動し、アイデンティティ（再）構築しつつも、その意味を考えるには、ライフストーリーという視点が必要なことを論じる。そして、ライフストーリーの成果を日本語教育に応用する際の注意点を述べる。

## 2. 言語使用者の「自己感」

第二言語を使っている「私」に対する感情や感覚は、その人が母語を使っている「私」に対するそれと同じなのかそれとも違っているのか。違っているとすれば、それはどのように違うのか。青木（2008）は、そのような感情のことを「自己感」と呼んでいる。Pavlenko（2006b）や Heinz（2001）にみられるように、このような「自己感」の違いは、多くの人に有能感（英語では自分の意見をはっきり言えるのは日本語ではできない等）、また時に好悪の感情を伴って体験されている。

問題は、なぜそうに感じられるのかである。言語によって、表現できる感情が異なることについては、多くの研究が行なわれている<sup>1</sup>。しかし、このように大文字の「言語」や「文化」によって表現できる感情そのものが異なっていたり、表現の仕方が異なっていることにその理由を求めたら、自己感が変わらない人がいるのはなぜかが説明できない。

---

<sup>1</sup> たとえば、西田（2000）やPavlenko（2006a）所収の各論文

英語を使って暮らす多くの多言語話者にインタビューした Burck (2005) は、大人になってから英語を使って暮らすようになった人が、かつての自分とは違う、新しい人になったような感じがするといっている例を紹介している。

上述の Heinz (2001) は、第一言語を話すときと第二言語を話すときの体験の違いだけではなく、「第一言語を話す体験」(この場合は、アメリカで英語以外の言語を話すこと)についての分析も行っている。ある調査協力者は次のように答えている。

大学の人は、まあみんなじゃないけど、スペイン語を話すことやスペイン語っていいなって思っているって思う。でも、ショッピングに行くとは違う。私たちはわざとスペイン語を話すの。人がどんなに人種差別主義者になれるかみるために。それで、とっても大声で話すと…何人かの人は…私たちをみて「あの人たちを見てごらん。外国、外国人」と思っているとか、私たちのことが嫌いじゃないかって感じる。ヨーロッパではそうじゃない。ドイツ語でも、フランス語でも、何でもそれは普通。でも、ここでは普通じゃない。(Heinz, 前掲論文: 98)

スペイン語を話すということは、大学では好意的に受けとめられるが、ショッピングセンターでは人に警戒心を起こさせてしまう。ヨーロッパでは普通だが、アメリカでは普通ではない。この協力者の言葉にも述べられているように、スペイン語を話すという体験は、大学内やショッピングセンターなど場所によって異なって構築されている。どういう人々に出会うのか、その人々の前で協力者がどのようにふるまうのか、それを同じ場にいる人がどのように扱うのかが大きく関係している。言うなれば、スペイン語を話すという体験とそれに対する感じ方は、周囲の人からの眼差しや態度の中で形作られているのである。

言語を使う「私」に対する自己感とは、結局はその人とその言語を使う社会との関係から生まれてくるものだと思えることができる。その感覚とは、決してその人の性格や言語を学ぶ動機付け、文化的距離に還元できるものではない。

このような自己感にアクセスしていくためには、アイデンティティがキーワードになると考えられる。なぜなら、アイデンティティとは、個人と社会の関係を内包していることばであるからだ。以下では、言語使用者のアイデンティティを考えるための方策として、ライフストーリーという方法を紹介する。

### 3. ライフストーリー

#### 3.1 アイデンティティワーク

エスノメソドロジーの創始者の一人であるサックスは、アメリカで「ホットロッダー」(いわゆる暴走族)と呼ばれる若者たちが、自分たちの車や持ち物、しぐさなどによって、自分たちを、支配者に押し付けられたティーンエイジャーというカテゴリーではなく、「ホットロッダー」としてカテゴリー付ける方法を明らかにした。それらは、「改造車の車種。「ホットロッド」に乗るときの服装。ホットロッダー同士が道ですれちがったときの挨拶の仕方等々。詳細な部分にわたる(好井, 1991: 124)」。私は「ホットロッダー」なのか、あの人はどうか、どのような行動をすると「ホットロッダー」ではないのか、彼らが出会う場で「ホットロッダー」とは誰かが決められている。ホットロッダーであることは、常に(再)構築され続けている。

さらに、会話を詳細にみると、会話の参加者らが自分たちのカテゴリー(アイデンティティ)を会話の中で交渉し、また、カテゴリーの中での自分の立場を「建設的で交流的な主体(constructive and interactive agents)」として表していることがわかる(De Fina & Schifferin & Bamberg, 2008: 7)。

Bamberg の一連の研究では、日常生活で行われる Small Talk (世間話)を通じて、少年たちが自分はどうのような人間なのかを表現しているのかが検討されている(Korobov & Bamberg, 2007、Bamberg & Georgakopoulou, 2008、Bamberg, 2008 など)。彼らは、Davis & Harre のポジショニングという概念を使い、会話全体の文脈やその直前の対話者や司会者の発言、さらには表情なども取り入れ、ある発言自体が、なにを「意図」していたのか、どのような自分を表現しようとしていたのかを分析しようとする。そこで明らかになるのは、アイデンティティとは、日常的な「私はだれか」をめぐる意図的／無意思的な実践(「アイデンティティワーク」)であり、「このような繰り返して続けられる(人と人との)関係が、結局は、私たちが日々変わり続けているにも関わらず、『私は同じだ』という感覚を与える(Bamberg & Georgakopoulou, 2008, 379)」ということだ。アイデンティティとは、「言説行為の反復という過程をつうじて事後的に構築された沈殿物(上野, 2005: 27)」なのである。

このようなアイデンティティ観は、そのアイデンティティが構築される場と非常に密接な関係を持っている。場が変われば、アイデンティティも変わる。そう考えると、ある人のアイデンティティは、その人が参加した場の数だけ(再)構築されることに

なる。話す言語が変わると「自己感」が変わることは、ある場に固有に（再）構築されるアイデンティティ（たち）の違いによると考えられる。ではなぜ、それぞれのアイデンティティに好悪の感情が生まれるのか。

### 3.2 LPP 論のアイデンティティ観

場の参加とそこでの技能の熟達を、アイデンティティの変化と考えるモデルに正統的周辺参加論（以下、LPP 論）がある。そこでの議論で特に注目されるのは、新参者から熟練者へと実践の文化を自分のものにして十全的な実践者になる過程は、「何かが出来ようになる」ということは、それは参加の形の変化やあるポジションを獲得することを含んでおり、『全人格的』問題（“whole person” issue）なのである」（ソーヤー、2006a: 70）とする指摘である。

さらに、ソーヤー（2006b）は、複数のコミュニティへ参加することで、実践コミュニティへの参加者は、「周辺から十全的参加へといった直線的な軌道の上にプロット出来ない」、「ユニークなポジション」を獲得するのであり、それはとりもなおさず「新しい自己の発見と創造であ」としている。

しかし、高木（1999）は、「独自のライフコースをもった固有名としての学習者」（8）の固有名性と共同体の中における役割アイデンティティを一元的な尺度でとらえようとする問題があるとしている。

成員性は（諸）実践共同体における関係性によって相対的に規定される学習者の位置にかかわる概念である。これに対して個人史は、その人だけが体験し得たこと、世界におけるその人の絶対的な位置にかかわる。このように成員性と個人史はその位相が異なるが故に互いに相手の「外部」である。（中略）（実践共同体における役割性の位相）の水準のみである人の体験を理解することは、個体の時間的な連続性、持続という異なる原理によって構造化されている個人史という位相を無視することになる。（高木、前掲論文: 9-10）

このように考えると、ある個人が、ある場の実践に参加し、そこでなんらかの位置をとることの、当の本人にとっての意味とは、その場で構築されるアイデンティティだけではなく、その人の「個人史の意味」を考えてこそ理解できるものということになる。実践への参加は、参加による技能や言語の習得を伴うが、そこには、その習得を促進し、また排除する権力との関係、同じコミュニティに参加する者同士の妥協、

競合、競争、葛藤などを含む政治的問題、そしてその結果としてのそこでの位置づけをも不可避免的に伴っている。それを、体験した本人が、その体験をどのように感じるかは、その時、その場における位置だけではなく、かつてその人が他の実践への参加で、どのような位置にいたのか、またこれからどのような実践に参加したいのか、それらの実践で占めた位置との参照関係によって決められるのだ。

### 3.3 ライフストーリー

いつかの場を移動していく固有名をもった個人を、ある一つの場で構築される役割／ポジションに還元することは出来ない。ある一つの共同体だけではなく、いくつもの共同体を移動し、それぞれの場所で構築され、また日々（再）構築される位置取りを背負いながら過去と未来と現在を渡り歩く個人にアクセスしていくには、ライフストーリーが一つの手段として考えられる。

ライフストーリーとは、その人の過去にあった出来事をつなげてできる「自己についての語り」であり、自己についての多くの物語を集大成した一つの物語である（ガーゲン, 2004: 247）。人は、場所や時間によって異なるアイデンティティをもつ。アイデンティティとはある人に本質として与えられた、不変的なものではなく、状況によって常に移り変わるものである（ガーゲン, 2004）。そのようにアイデンティティが状況によって移り変わる中でも、人は、「私」という統一感を保っている複雑な存在だ。その統一感の源泉の一つと考えられているのが、ライフストーリーだ。

われわれは、物語の形態の使用を通して、われわれ独自の同一性と自己概念を達成する。そして、それを唯一の展開し発展するストーリーの表現として理解することによって自分の存在を一つの統一体にする。われわれは、自分のストーリーのまっただ中において、それがどう終わるのかを確かめることはできない。われわれは、新しい出来事が自分の生に加わるごとに、プロットをたえず改訂しなくてはならない。したがって、自己とは静的な物でも実体でもなく、個人的なさまざまな出来事を一つの歴史的なまとまりの中に形づくったものである。その歴史的まとまりは、その人がそれまで何であったかということだけではなく、その人が将来何になるのかという期待をも含んでいる。

（Polkinghorne, 1988: 150. 翻訳はブルーナー, 1999: 162 からの引用）

この物語では、現在の自分に至るまでの道のりが語られる。そして「私とは何者なのか」という問いに答えられる。それでは、それらのアイデンティティを「好き」ま

たは「嫌い」という感覚はどこからくるのか。

付け加えておきたいことは、この物語すら、何度も作りかえられるということだ。また話し相手やそのときの状況によって、変わる。同じ事柄がいくつもの話を生むように。

「自己感」やそれぞれのアイデンティティに対する感情とは、物語的な意味の中でこそ理解されるものだと言える。

ここで一つ疑問が生じる。ライフストーリーの成果を日本語教育に応用する際のことである。ハッピーなライフストーリー、学習成功者のライフストーリーはモデル・ストーリーとしてとらえることができるのだろうか。日本語教育にライフストーリーの成果を用いる際の横逸はないのだろうか。以下では、筆者の調査<sup>2</sup>から得られたライフストーリーを一つ紹介し、その点について考察を加える。

#### 4. 日本語教育への示唆

##### 4.1 フン君のストーリー<sup>3</sup>

フン君は虹野大学の大学院生だ。日本語の予備教育を受けて、大学1年のときから虹野大学に通っている。大学入学当初はなかなか友だちが見つけれないでいた。勉強をする以外に、最初は「面白いかなと思って」あるサークルに入った。しかし「完全にオタクの雰囲気、一回だけ行って、あとは行かなかった」。その後ある人に誘われてテニスサークルに入ったが、一ヶ月でやめてしまった。そして、主に同じプログラムで入学した韓国人の友だちといっしょに1年を過ごした。

そうこうするうちに2年生になったが、その一学期に、日本人の友だち(A君)が一人できた。その子はある授業で知り合った子だったのだが、「急に韓国人の留学生もいるんだから、韓国語でも習おうって言い出した」。フン君は授業中も、「韓国ではこう表現するって教えてあげたりした」。そのおかげで彼とはすごく親しくなった。

---

<sup>2</sup> 中山(2009a)では、「自分らしさ」に注目して、韓国人男子留学生5人のライフストーリーを分析した。5人は、日本語を話す「自分らしさ」をめぐる異なる3つのタイプに分けられた。すなわち、日本語を話す自分も韓国語を話す自分も同じで、両方とも自分らしいと思うJIN君とW君。韓国語を話す自分は自分らしいが、日本語を話す自分は自分らしくないと感じている朴さんとイ君、日本語を話す自分と韓国語を話す自分は異なっているが、両方とも自分らしいと感じているフン君である。

<sup>3</sup> フン君のストーリーは、中山(2007)で紹介した。ここでは、以下の議論を進める便宜上、バージョンを変えて再録する

A君は偶然、「あんまりマジメな子」ではなく、友だちも多くて「よく集まって、よく遊ぶ子だった」。その子の知り合いの友だちがたくさんできた。彼らは日本と韓国のサッカーの試合があるときも家に呼んでくれて、いっしょにサッカーを見たりした。

3年生になってフン君は大学の近くに引っ越したが、家が近くなってからは、授業の後には日本人の友だちと卓球をしたり、いっしょに試験準備のためにファミリーレストランで勉強するようになった。フン君の日本語はその頃大幅に伸びた。

それ以前は、学科の飲み会などにいっても、正直に言って聞いてばかりで面白くなかったが、日本語ができるようになってからは、積極的に話すようになった。学科の友だちは「おまえはそんな子だったのか。今まではすごくおとなしい子だと思っていた」と言い、友だちのフン君を見る目が変わった。合コンにもよく呼ばれた。「留学生ネタを使ってその場を盛り上げろ」というのだ。

フン:はじめはみんな話すことがないから、留学生が一人いたらその子にばつと質問がいくんですね。韓国ではキムチがすきなのかっていうのから始まって、それから徐々に始まって、雰囲気をよくするんです。そうしようって2, 3回行って。

中山:あっそうハハ

フン:そうしたら一回、僕の友だちが一人ある女の子が好きだったんだけど、その女の子が全然関心がなかったのか、話すことがないから僕に質問するんです韓国に関することを。友だちが後から、お前そのつもりなのかってハハハハ。お前関心もないくせにそうするのかって。質問に答えてあげただけなのにハハハ<sup>4</sup>

友だちから「低級な」日本語も習って、今フン君の話す日本語は虹野方言になっている。友だちには、話すと普通だが、文章を書くとおかしいといわれる。

4年生になってからは、研究室に配属になった。自由といえば自由な研究室だ。友だちとスキーをしたり、富士山に登ったりした。研究室の雰囲気は自由なのだが、最初は空気を読むのが難しかった。でも、最近は慣れてきた。

この研究室の中でもフン君は日本語をたくさん習った。研究室の人と話したり、また発表の準備などをして、日本語がまた伸びた。特に先輩の一人に、体育会出身の先輩がいた。研究室では、フン君と先輩しかタバコを吸う人がいない。研究室は禁煙なので、よく先輩に「フン君行こう」と誘われて、一時間に一回ずつぐらいタバコを吸

---

<sup>4</sup> インタビューは韓国語で行われた。翻訳は筆者。太字は日本語で話された箇所。



いに喫煙所まで行った。それに彼は酒をよく飲む。飲むと他の人にも勧めるという典型的な体育会スタイルだった。でも、研究室の中で、その飲み方に合わせられるのはフン君一人だった。先輩はフン君のことをすごくかわいがってくれた。先輩とは二人で酒を飲みながら色々な話をした。

何ていうのかな。今までとは違う日本語を話さなければならなくなりましたよ。感情表現もしなければならぬし。一対一で酒を飲んだのは、韓国語が好きだという子とその先輩しかなかったんです。韓国語が好きだっていう子と酒を飲むと、韓国語だけ教えてあげただけで、その先輩と酒を飲むと、色々小さいことまで、だから、くだらないことまで全部話さなくちゃいけないでしょ。それで表現をしようとしてたら、すごく伸びたと思います。それに酒を飲んだら、また言葉がうまく出るじゃないですか。

そんなふうになっていると、だんだんと日本語が上手になってきた。今、フン君は自分が日本語を話していても、韓国語の方言を話しているように感じる。ただ、韓国人と日本人では、フン君の受け止められ方は違うようだ。日本ではB型にみられ、韓国ではA型に見られる。

中山:日本にいるフン君と韓国にいるフン君と差があるかな？

フン君:んー何ていうかな、差があることはあると思います。いわゆるA型の性格B型の性格ってあるじゃないですか。僕はA型小心で、そんなので、B型はちょっと大胆で個人主義でってあるじゃないですか。日本人の子がいうんですけど、僕をみてB型みたいっていうんです。韓国に帰れば100%A型だと言われるんですね。

中山:あーそう？

フン君:ええ。だから人が考えるのは韓国での平均的なA型はB型に見えるみたいで。僕の感じでは。だからわざわざB型のように見えようとするそんなのが。

中山:ここで？

フン君:ええ。血液型で話すのはちょっとおかしいんだけど、ちょっと韓国ではそうではないのに、日本ではオーバーにするところがあるみたいだし。

フン君は修士を修了したら兵役にいかなければならない。それが終わったら、博士課程に入るために日本に戻ってくるかもしれない。帰ってくるのだったら、知り合いもいるし、虹野大学に帰ってきたいと思っている。

## 4.2 B型のフン君

フン君は友だちも多く、日本の生活を楽しんでいるように見える。またフン君のストーリーを見るかぎり、現在のフン君には大きな葛藤がないかのように読める。

友だちといっしょにさわぐ場、合コン、研究室、先輩と飲む場など、それぞれの場でフン君は、異なって（再）構築されただろう。同級生として、後輩として、また学生として。そして日本語が上手くなったり、研究室の作法がわかっていくにつれて、またその位置取りを変えただろう。

日本語を話す時の「B型」のフン君とは、そのように日本語を話す場を移動しながら作られていったに違いないのである。それは韓国にいる時に「小心」な「A型」のフン君とは違う。にもかかわらず、フン君は両者とも「自分らしい」としている。筆者はこれを稀有なことだと考えるのである。

このストーリーから日本語教育に示唆されることはなんだろう。学部留学生の日本語習得には、友だちが大きな役割を話していること、さらに研究室という場が、留学生にとっていかにそこにふさわしく振舞うのが難しいのか、などだろう。ひょっとしたら、屈託なく自分の新たな位置付けを受入れることが日本語上達の鍵だと考える人もいるかもしれない。しかし、本当にそうなのだろうか。

ここで注目しておきたいのは、フン君の合コンのエピソードである。彼は、友だちから「韓国人」として、また「留学生」として振舞うことを求められ、そのように振舞った。彼は、「留学生」として呼びかけられ、それに答えたということなのだ。

ここに、彼に「～らしく振舞え」という言説的権力の力を読み取ることは難しくない。「韓国人＝キムチ、辛いもの」とする言説が日本語には存在し、フン君をそこに回収しようとする。

発話し、語り、そのことによって言説に結果を生み出す「私」があるところには、まずその「私」に先行する言説、その「私」を可能にする言説があり、その意志を制限する軌道を言語によって作る言説がある。したがって、言説の後に立って、自らの意志や意欲を言説を通して実行するような「私」など存在しない。反対に、「私」は呼ばれ、名付けられ、アルチュセールの用語で言えば呼びかけを通してのみ存在するようになり、この言説上の構成とは「私」に先立って存在し、それは私の他動詞的な呼び出しなのである（バトラー、1997: 161）。

フン君は、フン君を日本の中での「韓国人」に回収しようとする言説に対する葛藤を

感じず「B型」のフン君を誕生させたのだろうか。それともそこには、「韓国人」としてのフン君をずらし、抵抗する日常的実践があったのだろうか。

現在の私は、これ以上論じることができないのである。しかし、言語習得成功者のストーリーをモデルとして受け取ることの危うさはそこにあるのではないか。つまり、韓国人として彼を回収しようとする言説を脱臼させることなく、そのまま受け入れたかのようにうつるフン君のストーリーをモデルとして流布させることによって、言語学習者に、フン君のように、葛藤なく、友だちを作ることをそそのかすことの危うさである。このようなライフストーリーが語られる背後には、ライフストーリーでは接近できないフン君の言語実践があることを忘れてはならないのではないか。

## 5. おわりに

本稿では、第二言語使用者の「自己感」という比較的新しいテーマを取り上げ、ライフストーリーが、第二言語使用体験を明らかにする一つの手法であることを示した。ライフストーリーという手法は、アイデンティティは日常的なアイデンティティワークを通じて（再）構築されるという前提に立ってはいるが、個々の場で（再）構築されるアイデンティティの個人史的な意味を考えられる。しかし、そこで語られた過去の言語実践に接近するすべを持たないがゆえに、そこで行われている日常的言語実践をブランクに入れ、結果としてできあがったストーリーをモデルとってしまう危険性があった。

フン君のライフストーリーも含めて、背後にあるさまざまな日常的な実践を消さないようにしながら、ライフストーリーを書くことはできないのか。どのようにすれば、日本語教育の実践に役立たせることはできないのか。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 青木直子 (2008) 「日本語を学ぶ人たちのオートノミーを守るために」『日本語教育』(138) 33-42.
- 上野千鶴子 (2005) 「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房 1-41.
- ガーゲン、ケネス (2004) 『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』永田素彦、深尾誠訳ナカニシヤ出版.

- ソーヤーりえこ (2006a) 「社会的実践としての学習ー状況的学習論概観」 上野直樹、ソーヤーりえこ編著『文化と状況的学習ー実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社 40-88.
- ソーヤーりえこ (2006b) 「理系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化」 上野直樹、ソーヤーりえこ編著『文化と状況的学習ー実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社 91-124.
- 高木光太郎 (1999) 「正統的周辺参加論におけるアイデンティティ構築概念の拡張ー実践的共同体間移動を視野に入れた学習論のために」『東京学芸大学海外子女教育センター紀要』(10) 3-13.
- 鄭暎恵 (2005) 「言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ」 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房 199-240.
- 中山亜紀子 (2007) 「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴ー「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』(19) 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 97-128.
- 中山亜紀子 (2009a) 『「日本語を話す私」と自分らしさー韓国人留学生のライフストーリー』平成 20 年度大阪大学大学院文学研究科博士学位申請論文 (未刊行)
- 中山亜紀子 (2009b) 「第二言語を使って生きるという体験ーアイデンティティの(再)構築をめぐって」『2009 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』177-182.
- 西田ひろ子 (2000) 『人間行動原理に基づいた異文化間コミュニケーション』創元社.
- バトラー、ジュディス (1997) 「批評的にクイア」クレア・マリィ訳『現代思想臨時増刊レズビアン／ゲイ・スタディーズ』1997 年 5 月号 159-176.
- ブルーナー、ジェローム (1999) 『意味の復権ーフォークサイコロジーに向けて』岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子訳 ミネルヴァ書房.
- 八木真奈美 (2004) 「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」『質的心理学研究』(3) 157-172.
- 好井裕明 (1991) 「『障害者』という自己執行カテゴリーの挑戦」山田富秋、好井裕明著『排除と差別のエスノメソドロジー<いまーここ>の権力作用を解説する』新曜社 117-148.
- Bamberg, M.(2008) Blank Check for Biography? Openness and Ingenuity in the Management of the 'Who-Am-I-Question'. —what life stories actually may not be good for— In D.

- Schiffrin & A De Fina (Eds.), Georgetown University Round Tables Proceedings.
- Block, D. (2007). The rise of identity in SLA research, post Firth and Wagner. *The Modern Language Journal*, 91, 863-876.
- Burck, C. (2005). *Multilingual Living: Explorations of Language and Subjectivity*. New York, NY: Palgrave.
- De Fina, A., Schiffrin, D., & Bamberg, M. (2006). Introduction. In A. De Fina, D. Schiffrin, & M. Bamberg (Eds.), *Discourse and Identity* (pp. 1-23). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heinz, B. (2001). 'Fish in the river': Experiences of bicultural bilingual speakers. *Multilingua*, 20(1), 85-108.
- Korobov, N., & Bamberg, M. (2007). "Strip poker! They don't show nothing!": Positioning identities in adolescent male talk about a television game show. In M. Bamberg, A. DeFina, & D. Schiffrin (Eds.), *Selves and Identities in Narrative and Discourse* (pp. 253-271). Amsterdam: John Benjamins. Retrieved February 13, 2008, from <http://www.clarku.edu/~mbamberg/publications.html>
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. London: Longman.
- Pavlenko, A. (Ed.), (2006a). *Bilingual Minds: Emotional Experience, Expression and Representation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Pavlenko, A. (2006b). Bilingual selves. In A. Pavlenko (Ed.), *Bilingual Minds: Emotional Experience, Expression and Representation* (pp. 1-33). Clevedon: Multilingual Matters.
- Pavlenko, A. & Blackledge, A. (Eds.), (2004). *Negotiation of Identities in Multilingual Context*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Polkinghorne, D. (1988). *Narrative Knowing and the Human Sciences*. Albany, NY: State University of New York Press.

(佐賀大学留学生センター准教授)